

## 聖トマス・アキナスの『神学大全』と三位一体論

佐々木 徹

### はじめに

本小論においては、13世紀を生きた聖トマス・アキナス (St. Thomas Aquinas) の『神学大全』<sup>(1)</sup>の全体的組み立て・見取り図について考察が試みられる。

大全 (Summa [Summula]) は、個別事項の考察に停滞することなく、且つ又要約において削減されることなく、多様な学問的素材の全体を、収集し秩序付けることを課題とするという。大全は、12世紀以降ヨーロッパにおいて一般的に学術研究の叙述方式・方法として、神学のみならず、法学、医学において、さらには哲学や自由学芸七科においても採用されていたという<sup>(2)</sup>。ところで、神学大全といった場合、それは、神学以外の一般諸学の摂取、それとの対話、折衝、対決をなしつつ、それらの一般諸学をキリスト教神学のうちに包摂して、神学そのものが豊かに深めらる事態を示すことになろう。聖トマスにとって神学とは、言うまでもなく「聖なる教え (sacra doctrina)」<sup>(3)</sup>であり、神学大全とはキリスト教神学の組織的叙述に他ならないのである。

聖トマスの『神学大全』の叙述は、ある事柄をめぐる、問題 (問い) が提起され、異論の幾つかが示された後に反対意見 (Sed contra)、反論主文 (Respondeo) と異論に関する説明が述べられるという形を取っている。このような叙述方式は、聖トマスにおいては、神学の初心者達 (incipientes)<sup>(4)</sup>に向けて『神学大全』が執筆されたことによるであろう。しかも、このような個々の事柄をめぐる議論の進め方のみならず、第Ⅰ部が神論・三位一体論・創造論、第Ⅱ部が理性的被造物の神に向かう運動 (第Ⅱ部1・一般倫理学、第Ⅱ部2・特殊倫理学)、第Ⅲ部がキリスト論、秘蹟論という構成<sup>(5)</sup>自体が、教会生活においても神学的にもキリスト教信仰の深みを目指す初心者達への配慮を示しているとも言えよう。聖トマスからすれば、人間は本性的に至福 (beatitudo) を憧憬し、誰もがそれを明確にわきまえているわけではなくとも、また、誰もが自らの至福を神であるとしているわけではなくとも<sup>(6)</sup>、人間の究極的な根源にして目標<sup>(7)</sup>、あるいは至福である完全なる善は神である<sup>(8)</sup>から、およそ全ての人々は聖トマスの『神学大全』での討論と考察に招かれている初心者であるとも言えよう。どのようなキリスト者でも、いかに優れた宗教家でも、人間は神については、いつでも初心者であるということにもなろう。この神が人間を支え、招き、人間はこの神をたずね、イエス・キリストによって救いの充実へと参入し神に帰るのである。従って、『神学大全』全体が恵み深い神による人間陶冶の書としても読まれるのではないだろうか<sup>(9)</sup>。そして、『神学大全』のこのような教育的配慮は、神学上の理にかなったものである。マルティン・グラープマン (Martin Grabmann) は、スコラ神学における、ペトルス・ロンバルドゥス (Petrus Lombardus) などによる「命題集」を教義学的著作の表題、「大全」を様々な諸学科の統合的叙述のための表題であるとしている<sup>(10)</sup>が、

「教義学」という名称がカトリック神学において定着したのは17世紀の終わりごろからであると言われ<sup>(11)</sup>、「教義学」という概念をもって説明するのであれば、聖トマスの『神学大全』の構成・見取り図には、ペトルス・ロンバルドゥスの『命題集』に優るとも劣らない教義学的深慮が指摘できるのである。それは、後にみるように独特の三位一体論的構成である<sup>(12)</sup>。この指摘と共に、本論は、聖トマスの『神学大全』がまさに神学の大全であることの所以を、叙述の構成・組み立てあるいは見取り図の面から、明確にしようとするものである。また、『神学大全』が教義学的著作であるなら、それが神学における他の諸学科の問題に対する言及や配慮をなすのは当然なのである。

## 註

- (1) 本小論で使用する、聖トマス・アクィナスの『神学大全』は次のものである。S. Thomas Aquinas, *Summa Theologiae*, Marietti.; S. Thomas Aquinas, *Summa Theologiae*, Biblioteca de Autores Christianos, Madrid.<Summa Theologiaeの略号ST>
- (2) 以上、「大全」については次を参照。L. Hödl, *Summa. Summenliteratur*, in: *Lexikon für Theologie und Kirche* 9, 1164-1167, Herder.; Derselbe, *Summa (Summula)*. A. Scholastische Literatur- und Wissenschaftsgeschichte, in: *Lexikon des Mittelalters* VIII, 306-308, Deutscher Taschenbuch Verlag, 2002.
- (3) Cf. ST.1,q.1.
- (4) Cf. ST.1,Prologus.
- (5) ST.1,q.2.Quia igitur principalis intentio huius sacrae doctrinae est Dei cognitionem tradere, et non solum secundum quod in se est, sed etiam secundum quod est principium rerum et finis earum, et specialiter rationalis creaturae, ut ex dictis est manifestum; ad huius doctrinae expositionem intendentes, primo tractabimus de Deo; secundo, de motu rationalis creaturae in Deum; tertio, de Christo, qui, secundum quod homo, via est nobis tenendi in Deum. 尚、本小論第1章参照。
- (6) ST.1,q.2,a.1,Ad primum.
- (7) Cf. ST.1,q.1,a.7,Respondeo., ST.1,q.2.
- (8) ST.1,q.2,a.1,Ad primum.
- (9) Cf. Marie-Dominique Chenu, Le plan de la Somme théologique de S. Thomas, dans *Revue Thomiste. Janvier-Mars 1939*, p.93-107, p.104.
- (10) Martin Grabmann, Einführung in die Summa Theologiae des hl. Thomas von Aquin, Freiburg im Breisgau, 1919, Herdersche Verlagshandlung, S.2f.
- (11) Vgl. Jürgen Werbick, Prolegomena, in: *Handbuch der Dogmatik*. Band 1., 2. Aufl., Patmos Verlag, Düsseldorf, 1995, S.39.
- (12) 本小論第II章参照。

## I 救済史の自覚・・・『神学大全』の全体的見取り図 (A)

聖トマスの『神学大全』の見取り図を要約すれば次の如くである<sup>(1)</sup>。

◎ 第I部：神について。第1問は聖なる教え（キリスト教神学）の学的特質について論じている。第2問以降は神についての考察と創造論であるが、それは（ア）De Deo uno（神の存在と本質の唯一性〔本質的諸完全性〕についての考察）、（イ）De Deo trino（ペルソナの三位一体についての考察）、（ウ）創造論に区分される。

◎ 第Ⅱ部：理性的被造物の神に向かう運動。第Ⅱ部1は一般倫理学の叙述であり、第Ⅱ部2は特殊な神学的倫理学である。

◎ 第Ⅲ部：人間として、我々にとって神への道であるキリストについて。キリスト論と秘蹟論である。秘蹟論の叙述の第90問で、聖トマスの『神学大全』執筆は中断し、聖トマス自身の手になるものとしては、この書は完成に近づきつつも未完に終わっている。

聖トマスの『神学大全』の全体的見取り図に関して、現代の研究史上、本格的な議論を開始せしめたのは、マリー＝ドミニク・シュニュ（Marie-Dominique Chenu）である<sup>(2)</sup>。シュニュは、聖トマスの『神学大全』の見取り図として新プラトン主義的な、あるいはキリスト教における新プラトン主義派の「発出と帰還（exitus et reditus, l'émanation et le retour）」<sup>(3)</sup>の図式もしくは秩序を指摘したのである。それは、シュニュによれば、救済史（histoire sainte）と初学者の学的練磨のための秩序・順序（ordo disciplinae）にふさわしいものだったのである<sup>(4)</sup>。シュニュによって、聖トマスの『神学大全』における救済史の叙述と考察の重要性が明確化されたと言えよう。聖アウグスティヌスを尊重しつつも、聖トマス神学ではアリストテレス哲学との折衝とその受容がなされたことはよく知られているが、シュニュによると、アリストテレスの諸学問の分類がその勢力圏から除外する学科があるなら、それはまさしく歴史なのである<sup>(5)</sup>。それ故シュニュは次のように述べている。

「聖トマスは、アリストテレスの学的世界をこえて、発出と帰還という新プラトン主義的主題に依拠したのである。なぜなら、神学は神についての学問であり、万物はその産出においても、その究極的結末においても、即ち発出と帰還において神との関係のもとに探究されねばならないからである。」<sup>(6)</sup>

シュニュによる、『神学大全』の全体的な見取り図（plan）の要約は次のとおりである。「第Ⅰ部：発出。根源としての神。第Ⅱ部：帰還。究極的目的としての神。そして実際、神の自由で全く無償の計画構図に従って——この神の計画構図を我々に啓示するのは聖なる救済史であるが——この帰還は人にして神なるキリストによって成就されるのだから、第Ⅲ部はこの帰還の《キリスト教的》諸条件を探究することになる、即ち、ここでは他より以上に、歴史が明白に、教師であることになる。というのも、歴史は言葉の卓越した意味において啓示的になるからである。そして思索は、神の愛の甘美な諸々の偶然的出来事に自らを適合させることに自らの真の価値を見出すことになる。」<sup>(7)</sup>『神学大全』の全体的見取り図とその区分は、神学の主題の本性そのものについて企図されたものであり、これ以上に適切なことはありえないのである<sup>(8)</sup>。

シュニュ以来、聖トマスの『神学大全』の見取り図については、シュニュの主張を基本線にして様々な議論がなされてきたが、それは、この書における救済史的考察の充実を尊重し、故に、A・デンプ（A. Dempf）の、聖トマスは真理の超時間性のみを見たのであるとし聖トマスは決して歴史を必要とすることのない文字通り超時間的人間であったとする、いわば聖トマス神学の非歴史的（unhistorisch）な脱歴史化（Enthistorisierung）に対抗するものであると言えよう<sup>(9)</sup>。ウルリッヒ・ホルスト（P. Ulrich Horst）などは、歴史家（Historiker）としての聖トマスの文献批判にまつわる並々ならぬ手腕を指摘し、聖

アウグスティヌスに帰せられていた書物『教会の諸教義について (De ecclesiasticis dogmatibus)』を、聖トマスが正しくもGennadiusのものとした例などを挙げている<sup>(10)</sup>。シュニユ以来、彼の議論をさらに深く批判し発展させようとした人達によって、『神学大全』における救済史あるいは歴史に関する思索の豊穡が擁護されてきたとも言えよう<sup>(11)</sup>。そして、『神学大全』の全体的見取り図をさらに考察してゆく上で、次のマックス・ゼクラー (Max Seckler) の指摘は重要である。

「驚くべき仕方で、ここに歴史 (die Geschichte) の根源と目的が、存在 (das Sein) の源泉と完成が、理解 (das Verstehen) の第一原因と究極原因が、緊密な対応・一致へと到来する。こうして神学は救済史の《学問》に成ることができるのみならず、救済史それ自体が自らに、神学の根本企投を所持するのである。従って、トマスによれば、神学者が救済の諸々の出来事の錯綜したもつれに秩序をもたらすのではなく、救済の秩序が神学を構成する。」<sup>(12)</sup>

尚、さらに問われねばならないのは、救済史それ自体が自らに所持する神学の根本企投、あるいは神学を構成する救済の秩序である。確かに、神学者の宗教的実存の側からのみ言えば、救済史における神の愛の出来事は、神の自由で無償の行為による全くの偶然事である<sup>(13)</sup>とも言えようが、神学は救済史それ自体もしくは救済の秩序における、神学者の神学の根拠の理 (ことわり) あるいはさらに対象の存在と行為の秘義的な理を探究せねばならない。実際、ゼクラーは先に示した引用文の直後で次のように述べている。

「トマスはこの非常に重要な思想を次のように表現する。即ち彼によれば、学的練磨の秩序 (ordo disciplinae) は事柄の秩序 (ordo rerum) に従わねばならないのである。行為の担い手にして且つ理解の主体が神であるが故に、この事は可能である。」<sup>(14)</sup>

重要且つ正しい指摘であるが、シュニユを越えようとするものであってもシュニユの見解の基本線上で議論を進める限り問題は残るのではないだろうか。確かにシュニユは、聖トマスの『神学大全』における豊穡な救済史的もしくは歴史的次元に関して真理性に富む議論を提出し、この救済史的・歴史的次元が神学の初学者の学的練磨にも有効に資するものであることには納得がゆくのであるが、やはり『神学大全』の第三部の位置や意味づけについてはさらなる考察の余地があろう。ジャン・ピエール・トレル (Jean-Pierre Torrell) はシュニユの見解の基本線に関し、それが第三部をすぐさま統括しえなかったこと、そしてそこでキリストは、人間自らの目的への帰還を保障する、神によって意志された手段としてのみ登場するかのようにみえるという難点を挙げている<sup>(15)</sup>。これは当を得た指摘であろう。

## 註

- (1) 「はじめに」の註 (5) を参照。vgl. Andreas Speer, Die *Summa theologiae* lesen — eine Einführung, in: Die *Summa theologiae*. Werkinterpretation, Walter de Gruyter, 2005, S.12f.
- (2) Andreas Speer, Die *Summa theologiae* lesen — eine Einführung, op. cit., S.13f.
- (3) Marie-Dominique Chenu, Le plan de la Somme théologique de S. Thomas <以下, Le planと略記> dans *Revue Thomiste*. Janvier-Mars 1939, p.93-107, p.97,99. 尚, 片山寛『トマス・アクィナスの三位一体論研究』(創文社, 1995年) 第九章参照。

- (4) Le plan, p.100.
- (5) Le plan, p.97.
- (6) Le plan, p.97.
- (7) Le plan, p.98.
- (8) Cf. Le plan, p.100.
- (9) Cf. Yves Congar, Le sens de l' "économie" salutaire dans la "théologie" de S. Thomas d'Aquin (*Somme Théologique*) , dans *Thomas d'Aquin: sa vision de théologie et de l'Eglise*, Variorum Reprints, London, 1984 cap. III, p.122. vgl. P. Ulrich Horst OP, Über die Frage einer heilsökonomischen Theologie bei Thomas von Aquin, *Münchener Theologische Zeitschrift*, Jahrgang 12, 1961, Heft 2, Max Hueber Verlag, München, S.97-111, S.97f.
- (10) P. Ulrich Horst OP, Über die Frage einer heilsökonomischen Theologie bei Thomas von Aquin, op. cit., S.98.
- (11) Vgl. Otto H. Pesch OP, Um den Plan der Summa Theologiae des hl. Thomas von Aquin. Zu Max Secklers neuem Deutungsversuch, in: *Münchener Theologische Zeitschrift*, Jahrgang 16, 1965, Max Hueber Verlag, München, S.128-137.
- (12) Max Seckler, Das Heil in der Geschichte, 1964, Kösel-Verlag, München, S.35.
- (13) 本章の註 (8) 参照。
- (14) Max Seckler, Das Heil in der Geschichte, op. cit., S.35.
- (15) Jean-Pierre Torrell, *Magister Thomas*, aus dem Franz. übers. von Katharina Weibel, Daniel Fishli und Ruedi Imbach, Herder, 1995, S.169.

## II 三位一体論的構成…『神学大全』の全体的見取り図 (B)

ordo disciplinaeが従い対応するordo rerumもしくは対象即ち神におけるその根拠が探究されねばならないのである。これにより、聖トマス神学の豊かな救済史的・歴史的次元が尊重されつつ、救済史あるいは救済経緯においても失われることのない神の超越性にふさわしい聖トマス神学の特質を明確化しようとする。この点に関して、トレルが聖トマス神学における聖霊についての考察の重要性を述べているのは傾聴に値する。西方教会の伝統に従って言えば、神の永遠の三位一体において、父は子を生み、子は父から生まれ、聖霊は父と子から発出するのであるが、この故に聖霊は、聖トマスにおいても、父と子の三位一体的交わりの中心(heart)であり<sup>(1)</sup>、御父と御子の区別において双方を一致させ、御父と御子の喜びを完成する愛の一致なのである<sup>(2)</sup>。であるならば、『神学大全』の第二部をその大要において、神学の対象の面から、聖霊の働きについての考察であると理解するならば、神学大全の第一部と第三部は、第二部を間に挟んで、永遠の三位一体、即ち聖霊の交わりにおける御父と御子の差し向かい、あるいは御父と御子の聖霊による一致に対応していたということになろう。神学的思惟が、≪(A):父・子・聖霊という秩序(順序)に従う≫ことだけが、神の三位一体に対応するのではなく、≪(B):聖霊を中心にした父と子の差し向かいと交わりを映し出す≫という仕方、神の三位一体の秩序に従う場合もあると言えよう。[もとより、(A)と(B)が、事柄上矛盾することなどありえない。]通常は(A)がキリスト教神学における所謂常道であろうが、聖トマスの『神学大全』では彼が受け継いだドミニコ会初期の歴史的状況の中で、(B)の如き独自の教義学的叙述の全体的見取り図に至ったと考えられる。また既に、このような全体的見取り図において、御父と御子を一致させる聖霊を三位一体の完成であるとするサン・ヴィクトルのリカルドゥスの三位一体論<sup>(3)</sup>の影響を指摘できよう。ともあれ、聖トマスの『神学大全』が、(B)の如き



全体の見取り図を示すということは、第Ⅰ部の第2問～第26問が神論、第27問～第43問が三位一体論、それ以降の第44問から最後の第119問までが創造論の叙述になっていることから納得のいくことである。即ち、第Ⅰ部は、神論・三位一体論の脈絡の内に創造論が包摂されていると理解することができ、創造者は属性帰属により御父に帰せられるからである（属性帰属である故、これは御子と聖霊が創造者であることを排除するのではない）。すると、第Ⅱ部を挟んでの第Ⅰ部と第Ⅲ部は、聖霊の交わり・一致における御父と御子の差し向かいに対応しているのである。こうして、ordo rerumにordo disciplinaeが正直に倣い対応することになるのである。現代の我々から見れば、次のように言えよう。聖トマスの『神学大全』は彼の時代状況の促しに応じてなされた、創見に満ちた教義学の営みであったが、それは伝統的な三位一体論の内に堅実な足場を有していたのである。ゼクラーは、聖トマスの『神学大全』の設計図である発出・帰還図式が全存在の最も基本的な原則（das fundamentalste Gesetz allen Seins）を反映し、この原則は神の三位一体的生にも妥当するとしている<sup>(4)</sup>が、むしろ逆に、神の三位一体的生の存在の理法が、自余の全存在の最も基本的な原則の根拠もしくは原因であり、発出・帰還図式はこの原則を反映することによって、神の三位一体的生に対応すると言えよう。さらに踏み込んで言えば、発出・帰還図式といっても、それは二局面的に分節化されるはずである。即ち、神の三位一体的生に根拠づけられた、 $(\alpha)$  <被造物への関係における神自らの発出・帰還>と、 $(\beta)$  <それに対応する被造物の発出・帰還>である。救済史とはこれら $(\alpha)$ と $(\beta)$ によって織り成されており、それ故にこそゼクラーの表現を使えば、「救済の諸々の出来事の錯綜したもつれ」<sup>(5)</sup>なのである。そこに救済の秩序があるのは、 $(\alpha)$ の主体が三位一体の神そのものであるからであり、この神が救済史を主導するからに他ならない。尚、シュニユの見解の基本線上での興味深い示唆が、ミシェル・コルバン（Michel Corbin）によってなされている。それは、カンタベリーの聖アンセルムスがイエス・キリストの受肉の出来事の中心的意味をよりよく教えるために、キリストへの参照をせず——即ち、キリストを考慮に入れず——神と人間とのあいだの関係について語ることから始めた『何故に神は人となられたか』（Cur Deus homo）との構造的親近性が、聖トマスの『神学大全』の設計図、即ち発出・帰還図式【第Ⅰ部（神）- 第Ⅱ部（人間）⇒第Ⅲ部（キリスト）】の内に指摘しうるのではないかということである<sup>(6)</sup>。コルバンのこの意見は、聖アンセルムスから聖トマスへの、中世神学における連続的移行を積極的に捉えようとする点で大変有意義であるが、聖アンセルムスの“Cur Deus homo”の事柄・主題は専ら御子なる神の受肉とそれによる贖罪・和解であり、これは聖トマスの『神学大全』においても最も重要な事柄であるが、諸々の神学的事柄・主題の内の一つであり、この点で難があると言わねばならない。即ち、強引に、聖アンセルムスの“Cur Deus homo”の叙述との構造上の親近性からのみ、聖トマスの『神学大全』の設計図・全体的な見取り図を説明しつくそうとすれば、『神学大全』を歴史汎神論の営みとしてしまうことになるであろう。（これは又、聖アンセルムス神学についても誤解を招来することになるかもしれない。もとより聖アンセルムスにおいても、受肉の出来事の主体は三位一体の神である<sup>(7)</sup>。）聖トマスの『神学大全』については、被造物の世界の現実あるいは救済史への内在においてこそ際立つ、救済経綫における神の超越性についての考察にその特質を指摘することができると考える。聖トマス神学の探究対

象は神（即ち、三位一体の神＝イエス・キリストの神）であり、『神学大全』では当時の時代状況の中でこの対象をめぐるあらゆることが考察され、初学者のためにもなる教義学もしくは教理神学のいわば網羅的な指導書、教本であることが目指されたとも言えよう。聖トマス神学は、スコラ学の父<sup>(8)</sup>といわれる聖アンセルムス神学の、壮大で生産的な発展的継承であるに相違ないが、まさにその故に、継承における発展によって生じ顕在化・明確化する双方の独自の個性的特質が尊重されねばならないのである<sup>(9)</sup>。聖トマスの『神学大全』の第Ⅰ部、第Ⅱ部、第Ⅲ部に見出される発出・帰還図式は、聖霊の一致における御父と御子の差し向かいという神の永遠の三位一体を反映しそれに対応するものだったのである。

## 註

- (1) Jean-Pierre Torrell, Saint Thomas Aquinas. volume 2. Spiritual Master, translated by Robert Royal, The Catholic University of America Press, Washington, D.C., 2003, pp.175.
- (2) Ibid., p.184.
- (3) Richardus de Sancto Victore, De tribus appropriatis personis in Trinitate, in: Patrologiae Latinae Tomus 196, ed. J.-P. Migne, 992.C-D.
- (4) Max Seckler, Das Heil in der Geschichte, op. cit., S.46.
- (5) 第1章の註(13)を参照。
- (6) Michel Corbin, Le Chemin de la Theologie chez Thomas d'Aquin, Beauchesne, Paris, 1974, p.806.
- (7) Cf. St. Anselmus Cantuariensis, Epistolae de incarnatione verbi prior recensio, [5](I.287.4-6).; idem, Epistola de incarnatione verbi, III.(II.14.13-15).; idem, Cur deus homo, 2.XVIII.(II.129.17-25). 聖アンセルムスの諸作品は Schmitt 版全集に拠る。
- (8) Vgl. Martin Grabmann, Die Geschichte der scholastischen Methode, Erster Band, Akademie-Verlag, Berlin, 1988, S.258ff.
- (9) 聖アンセルムスから聖トマスにいたる中世神学の発展の一端については、次の拙論を参照。「聖アンセルムス研究の視界（序～Ⅲ）」（『言語文化研究所紀要』第17号所収，2011年7月，茨城キリスト教大学言語文化研究所）；「聖アンセルムス研究の視界（Ⅳ，結び）」（『言語文化研究所紀要』第18号所収，2012年6月，茨城キリスト教大学言語文化研究所）。

## 結語

以上、述べ来たったことから次のことを結語として提示する。

- (a) 聖トマスの『神学大全』の、第Ⅰ部、第Ⅱ部1・第Ⅱ部2、第Ⅲ部の全体的構成・見取り図は、聖霊の交わりにおける御父と御子の差し向かいという永遠の三位一体に対応し、それを映し出す三位一体論的なものであった。従って、この書においてはキリスト論の事柄が、内容的に最も大切である。
- (b) 聖トマスの『神学大全』は、聖トマスの教義学の主要著作である。
- (c) 教義学の著作として、聖トマスの『神学大全』は倫理神学を自らに包摂する。

## Die Summa Theologiae des hl. Thomas von Aquin und die Trinitätslehre

Toru Sasaki

Marie-Dominique Chenu hat mit dem neuplatonischen Schema von exitus und reditus auf die heilsgeschichtliche Prägung der Summa Theologiae des hl. Thomas von Aquin hingewiesen. Mit diesem Hinweis ist die Diskussion über die Theologie des hl. Thomas lebendiger als früher geworden und in die neue Dimension hineingegangen.

Der Aufbau der Summa Theologiae des hl. Thomas ist trinitätstheologisch. Dabei entspricht Prima Pars Gott dem Vater, Secunda Pars Gott dem Heiligen Geist und Tertia Pars Gott dem Sohne. Im Bezug auf das subiectum der sacra doctrina entspricht also die Summa Theologiae im ganzen dem dreifaltigen Gott, der sich als der Vater des Sohnes und als der Sohn des Vaters in der relationalen Gegensätzlichkeit durch die die beiden einigende Gemeinschaft des Heiligen Geistes zu- und ineinander ewig liebt. Der Heilige Geist *zwischen* dem Vater und dem Sohne ist die ewige Vollendung der göttlichen Trinität. In diesem Zusammenhang des trinitätstheologischen Gedankens kann auch der Einfluß des Richardus de Sancto Victore auf den Plan der Summa Theologiae betrachtet werden. Die Summa Theologiae des hl. Thomas von Aquin ist eigentlich sein *dogmatisches* Hauptwerk, das die Moralthologie in sich schließt.